

荏原、メンテ学習にXR

荏原が仮想現実（VR）などのクロスリアリティ（XR）技術をアフターサービスなどに活用し、成果を上げている。主力拠点の藤沢事業所（神奈川県藤沢市）に、半導体関連などの自社製品をVRに実物大で立体表示する施設を構える。VRでメンテナンス方法を学習するなどの取り組みが浸透しつつある。（戸村智幸）

半導体関連から

藤沢事業所の施設でVRを体験した。液晶シャッターメカネをかけると、ポンプが実物大で立体表示された。正面と側面の壁、床がスクリーンになっており、コントローラーを操作して立体表示をさまざまな角度から観察できる。分解するなど

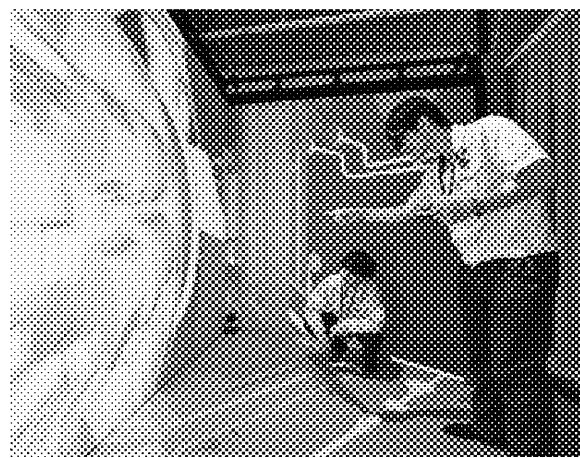
実物のように取り扱える。

荏原は2017年に社員が発案し、XRに組みはじめた。21年5月に5人体制で組織化し、社内で活用を始めた。藤沢事業所は精密電子セグメントの拠点のため、化学機械研

世界中と共有
CMP装置などのアフターサービスのトレーニングを簡単に受講できるのが利点だ。実際よりも手軽に製品の分解や組み立ての手順などを学べる。施設以外の拠点の社員がアバター（分身）で参加できるのも特徴だ。互いに同じVRを観察して指示を出せる。発案者でもある平田和也戦略技術研究部XR技術推進課長は、「世界中と共有でき、日本人と外

製品実物大立体表示・分解

「国内でもコミュニケーションを取りやすい」と意義を説く。



藤沢事業所の施設ではVRで製品を実物大で立体表示できる

半導体関連以外にも活用を広げられるとみられており、主力製品のポ

拠点外アバター参加可能

VRが有力候補だ。XRと称するようになり、複合現実（MR）と拡張現実（AR）にも取り組む。MRでは、米マイクロソフトの端末を装着してポンプを見て、ポンプに水がどう流れるかが端末に表示されるデモを体験した。ポンプの機能を理解しやすい。今後は実際の製品で適用することを目指す。

初心者でも容易
ARでは、ポンプのメンテナンスのため、コント

ロールパネルにスマートフォンを近づけると、スマホに手順が表示されるデモを体験した。手順に従えば、初心者でも操作できる。今後はベテランの技能を人工知能（AI）に学習させ、それをデータ化して参考にできるようにすることを目指す。ポンプの加工技術、メンテナンス時の触覚や異音の把握などベテランの暗黙知を形式知にするのが狙いだ。技能伝承につなげる。

XRによりアフターサービスなどを充実できれば差別化要因になる。活用範囲を拡大できるかが問われる。